

## マダガスカルの旅から

河 野 長 (地物)

今年の夏、文部省から研究費をいただいて、マダガスカルその他の国々へ岩石試料の採集にかけた。「マダガスカル・東アフリカ地学総合調査」という雄大な名前をもつプロジェクトで、理学部を中心に6名の隊員が参加した。

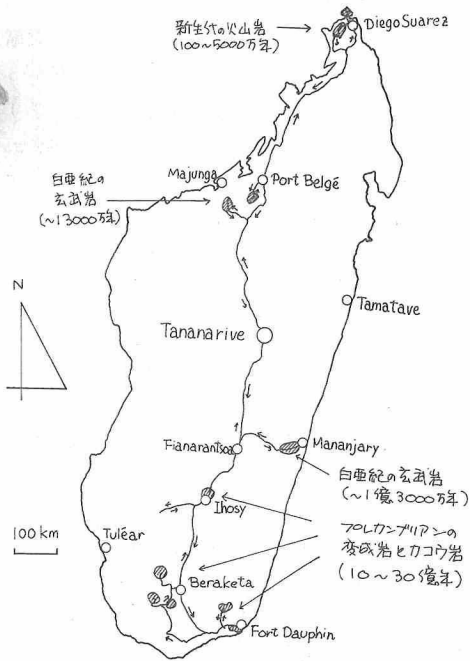
「マダガスカルへ行く」というと大抵、「それはどこにあるのですか」と聞かれる。やはりなじみのうすい国である。「アフリカの東にある大きな島ですよ」というと、「ああ、なるほど」と思い出す人が半分、あとの人はまだげんな顔だ。面積が日本の約1.6倍あって人口約800万人という、「そんなに広いの」とほとんどの人がびっくりする。

さて私達がこの遠くの島にかけたのは、 Gondwana大陸の分裂について研究したいというのが動機であった。Gondwana大陸とは約2億年昔に南半球

にあった超大陸で、その後1億5000万年～1億年前に分裂して、現在のアフリカ、南アメリカ、南極、オーストラリアの各大陸や、インド、マダガスカルなどに分れたと考えられている。こういった考えはすでに1920年代にウエーグナーなどによって発表されていたが、確実な証拠に乏しく一つの説として片づけられていた。それが、1960年代後半になって海洋底の研究が進むにつれて、決定的な証拠を伴って復活し、今では殆んど定説となっている。その証拠というのは、現在各大陸をへだてている大西洋、インド洋などの海底が、現在そのほぼ中央にある海嶺から順次広がってできていったことを示すもので、この海洋底拡大のプロセスを時間を逆にたどっていけば、約1億5000万年ないし2億年前には、大西洋もインド洋も存在しなかったことになってしまう。だから、これらの海底がまだできていなかった時代には、超大陸Gondwanaが存在していたことはほぼ確実と思われる。

海洋底拡大の様子は海上で測定される地磁気の異常から最も良く観測される。しかし、海底の地形が複雑だったり、海洋底の拡大のしかたが簡単でなかったりすると、地磁気異常から拡大の様子がうまくわからないこともある。マダガスカルはGondwana大陸の一部であった時代にはアフリカとインドにはさまれていたであろうと考えられるが、その位置については少し分不確かさがあり、モザンビークの近くについていたという考えや、それより約2000kmも北のケニア、ソマリア付近に陸続きであったという考えなどがある。

そこで、私達はこの問題を研究するためにマダガスカルへ岩石採集にかけたわけである。地学「総合」調査というのは地質学・地球物理学・地球化学の研究者がそれぞれ独自の立場から、また協力し合って仕事を進めていこうとすることを意味している。地質学者は白亜紀の玄武石をしらべて、これとアフリカのカー系火山岩やインドのデカン玄武岩との



マダガスカルにおけるサンプリング地域 (斜線部)

関連をしらべる。私自身も含めて地球物理担当の者は古地磁気の方から、マダガスカルの変化を求め。地球化学の人達はカリウム・アルゴン法やルビジウム・ストロンチウム法で最古の岩石のできた年代(約30億年ぐらい)をきめ、これと南アフリカやインドにある同程度に古い大陸の核と比較しようというのが大体の計画であった。

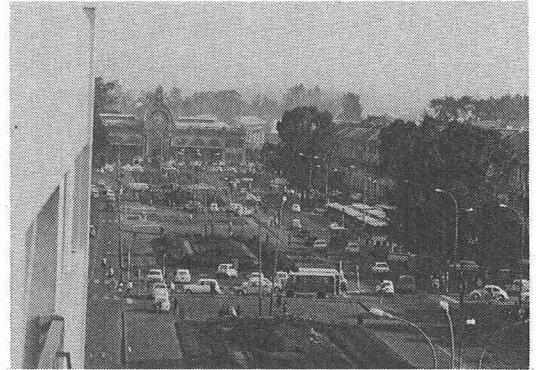
マダガスカルはまた恐竜の宝庫で、すでに2年前に国立科学博物館の方々が発掘に出かけておられる。私達は出発前にお話をうかがいに行き、道路がかなり悪いこと、フランス語は広く使われているが英語はだめなこと、中央の高地はかなりすずしく朝夕は冷えこむことなどをうかがい、その程度の予備知識で出発した。

まずずいぶん遠い国である。日本からの距離は約12000 kmでヨーロッパやアメリカ東海岸へ行くのとそれ程違わないが、飛行機便の関係で、途中ボンベイ、ナイロビと2泊しなければならない。飛行機から見おろすと小さな起伏が多く大きな平野は見えないが、それより木が少なく赤っぽい地肌がどこでも露出しているのが目につく。これは岩石の風化によってできたラテライト質の土壌で南方によく見かける。鉄の酸化物を多く含み養分に乏しい。実際マダガスカルは農産物が貧弱で、主食の米も一部輸入しているほどである。さてタナナリブのイボト空港に到着して機外へ出るとぬけるような素晴らしい晴空が頭上に広がっていた。マダガスカルはサバンナ気候で夏(日本の冬)が雨期、冬(日本の夏)が乾期なのである。私達が滞在していた7・8月はこの乾期で、日本の秋のようなさわやかな気候の時が多かった。

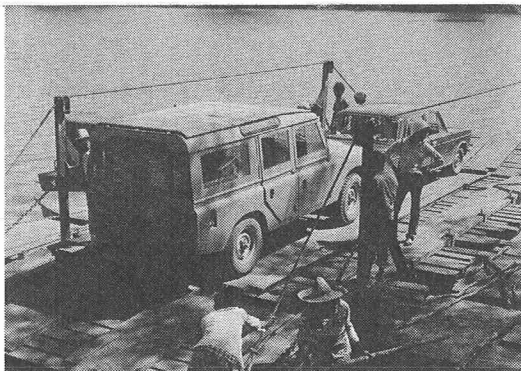
タナナリブは人口約40万人の都会で小さな丘がい



バオバブの樹のシルエット



タナナリブ市の目抜き「独立大通り」、正面は鉄道の駅



ベトファカフェリボート



独立大通りの朝市。食料品、荷などをならべて売っている。

くつもある海拔約1300メートルの高原の都市である。17世紀はじめにメリナ王朝がとりでを作って以来マダガスカル首都として栄えてきた。19世紀後半から1960年までフランスの植民地だったためにフランスの影響が色こく残っている。特にその中央集権的な官僚組織はかなりのもので、色々な手続きには悩まされた。幸い、現地の日本大使館が文化交流に熱心で、私達の隊も終始面倒を見ていただいたので短い時間内に有効な行動をすることができた。

私達は出発前からマダガスカル地質調査所と連絡をとっておいで、共同作業で岩石採集を行うことにしていた。日本からは機材をもって行き、マダガスカル側でランドローバー（四輪駆動車）を2台用意してくれた。これに日本から行った6人とマダガスカル側の地質学者3人、運転手2人が乗って文字通り北のはしから南のはしまで岩石を採集して走りまわった。わずか4週間で6700kmも走った。そして北端のディエゴ・スアレス付近で新生代の火山岩、中央のマジュンガ付近で白亜紀の玄武岩、南端のフォル・ドーファン付近で最も古い変成岩をほぼ予定通り採集することができたので、海外調査の目的は大体達成されたといえよう。今後研究に伴ってどんな結果が出るかが楽しみである。

いわゆる開発途上国ではあるが、この国のへき地を旅行してもそれほど突飛なことには出合わない。他の国々とも共通しているだろうが、最近の文化の地方浸透は著しいものと考えられる。こんなわけですぐ分知られていない国を旅行したわりには、血わき肉おどる探険・冒険といった趣きはほとんどなかった。もう一つの原因は、アフリカのすぐ東側にあるが人種的にはマレー人が大多数で、我々から見て親しみやすい顔立ちをしていることもある。また食事でも大きな都会ではフランス料理が豊富で、牛肉が安くてうまいこともあって異国情緒にひたるようなことが少なかったせいもある。

ただ、都会をはなれて採集旅行に出るとやはり現地の食事を食べる機会が多くなる。マダガスカル人の主食は米で、見ていると彼らは毎食毎食山のように盛って食べている。これはおかずが少ないためであって、我々日本人の昔の「一升めし」のようなものかも知れない。おかずとしては肉又は魚を煮たものが少しとほうれん草のようななっばの入ったすまし汁が普通つく。この肉の方は辛い味がつけてあるが、すまし汁は全く味がなく、なれないと異様な感

じがする。

タナナリブからディエゴ・スアレスに向う途中、ベトファカという所でフェリーボートで川をわたった時、丁度お昼になったので川岸にあるめし屋へ入ってこういった料理を注文した。肉が良いか魚が良いかと聞くのでとり肉のおかずを頼んだ。このことがあって数日してから、同行していたマダガスカル人の地質屋さん達から我々がコウモリの肉を食べたことを聞かされた。何でもとりの肉がなかったのでコウモリで代用したのだという。そのいわれてみると確かに変わった味の肉料理だったがもう後の祭りである。その他の珍しい食物としては、隊の何人かは南のフォル・ドーファン付近でそのあたりに沢山いる陸ガメの料理を食べてきた。油こくて泥くさいような感じなので好みに合うかどうかは各人とりどりだったようだ。後で陸ガメはしばらく前から捕獲を禁止されていることを聞いた。コウモリを食べる習慣の方はどの位ひろまっているかしらないが、大きなやつが飛びまわっているのは何度か見かけた。

普通に考えれば縁の遠い国なのに、マダガスカルには以外と多数の日本人がいてびっくりした。首都のタナナリブには、三井・三菱を除くほとんどの大手商社が駐在員をおいたり事務所を開いたりしている。資源の乏しい国だし人口も多くないから、原料輸出国としてもあるいは市場としても現在余り取引のある国とは思えないが、国土開発に伴うプラント輸出などを考えてじっくり商売の基礎固めをしているのかもしれない。また日本大使館もスタッフこそ少ないがタナナリブでは有数の事務所と公邸を構えていた。

商社と別に東食・大洋漁業などの水産会社はかなり大きな事務所をもっている。これはマグロやエビなどをインド洋でとったものを一旦マダガスカル港へ集結し、冷凍輸送船につみ替えて日本に運ぶということをしているからで、東岸のタマタブ、西岸のマジュンガにそれぞれこういった基地がある。すし屋でつまむ「江戸前」のマグロの何割かはこうやってマダガスカルから運ばれてきたものであるという。私達もタナナリブでこのマグロを御馳走になったが大変おいしかった。世界はせまくなった。知っていようと知っていまいと速くの国も以外な因縁で日本と結ばれていることを痛感させられた。